

四百年の時間が生んだ洗練。
絵付けと見まがう
青磁象眼のなめらかさ。

云流窓かづ新進作家まで多彩

なやきものがある熊本で、古くから細川藩の御用窯として知られた八代焼^{「ほうたやき」}と高田焼^{「たかだやき」}。とくに「青磁象眼^{「せいじぞうがん」}」の手法は全国でも唯一のもので、高雅上品と呼ばれる作風が愛好されています。かつての藩の注文書も残る、高田焼上野窯を訪ねました。

作品が並びます。

日本でも高田焼だけという青磁象眼
の手法に、やはり訪れた人の質問が
集まるのでしよう。棚には湯のみに象
眼をほどこし、ゆう葉（うわぐすり）
をかけて焼き上がるまでが、順を追つ
て実物で示してあります。

四百年の伝統を守つて

四百年の伝統を守つて

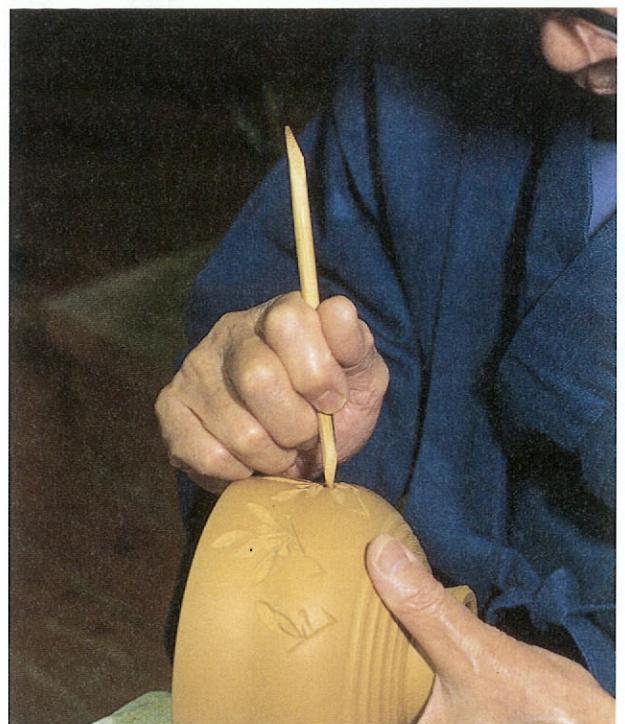
絵付けのように滑らかな象眼

れるため厚めに作つた本体を、あとで内側を削つて軽みを出します。素地と象眼部分の土の成分が異なるため、焼いた場合は収縮率が異なりますが、できあがりは凹凸もなく、ざくざく滑らか。象眼の手法を知らない人から見れば、絵付けしたものと間違われることもあるほどです。「一人前になるには十年くらいでしようか。この仕事は上を見たらキリがありません

伝統の技法で
新しい個性を表現

隣土から成形した素地に竹べらで文様をぼり、そのくぼみに水で溶かした白泥（＝天草産の長石）を塗り込むと、一度、二度と筆で埋めていきます。作業は文様が複雑になるほど時間を要し、大きなつぼでは象眼に三日かかることがあります。ほり込みの途中で素地が乾くと筆で水分を補い、また、象眼を入れ

伝統の技法で 新しい個性を表現



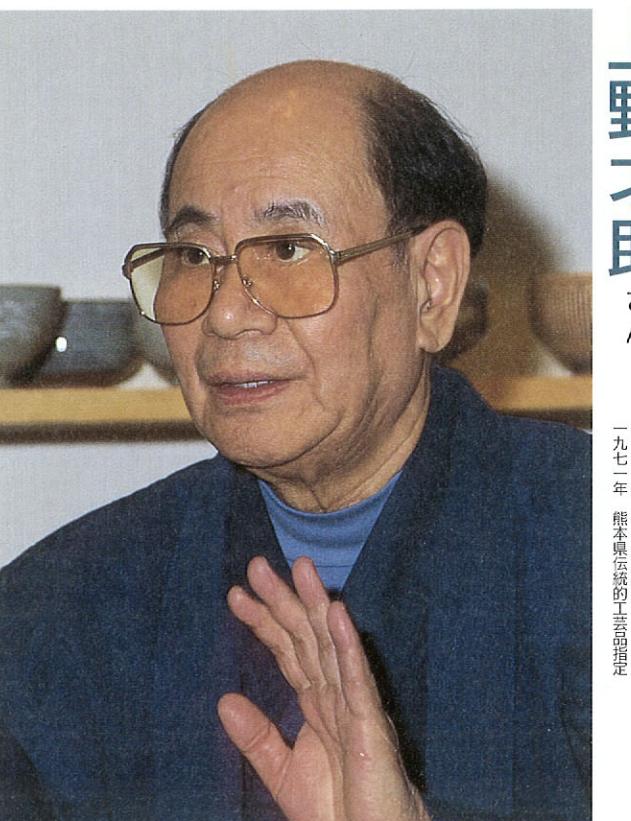
生乾きの素地に竹べらで文様を刻む。この後、象眼をほどこします



独特の淡い緑色はゆう薬でつけるのではなく、土に含まれる鉄分が発する色



高田焼発祥の窯（八代市平山地区）



高田焼上野窯十一代
あがのさいすけさち

一九三二年
一九四六年
一九七一年
八代市生まれ
先代の下で修業を始め
十一代を継承

